

援助観をめぐる一考察
－臨床心理士養成課程大学院生の態度構造－

教育学研究科 学校教育専攻 臨床心理学分野
06GP107 鈴木理恵

指導教官 花屋道子

目次

I. 問題と目的	3
II. 予備調査	7
III. 本調査	11
目的・手続きに関して	12
IV. 結果	14
M1	15
M2	29
V. 考察	35
M1 について	36
M2 について	39
VI. 総合考察	41
引用文献	46
資料	49

問題と目的

I. 問題と目的

近年、「心のケア」などの言葉が一般的に用いられ、心の問題に関心を持つ人が急増している。それとともに臨床心理職はこころの専門家として教育領域、医療領域、司法領域、福祉領域そして地域援助などを通して幅広く活躍しており、世の中に「臨床心理士」として知られるようになってきた（岡田、深津 2004）。またそれらの専門家が用いるカウンセリングのアプローチに対しても、高い関心が寄せられるようになっている。

その中で、河合（1970）はクライアントがカウンセリングに期待していることと、カウンセラーが狙いとしていることにズレがあることを指摘している。

例えば、非専門家は「一刻も早く治りたい、悩みを解決したい」と考えている人に対して、そのための指導や助言、具体的提案をすることを援助に期待するのに対し、心理臨床家はそのような問題そのものの解決法の伝授ではなく、クライアントのありようそのものに添って聴こうとする姿勢をとることが多いように思われる。

しかし、非専門家にとって、カウンセリングが心理臨床家と同じような意味合いを持っているかというところではないようである。中村（2004）は臨床心理士について、さまざまな局面で「守り」の薄くなった現代に生きる個人を支える必要性は、今後も高まっていき、臨床心理士は、まさにそのような、最も現代的な状況のただなかで、仕事をすることを求められている期待の助っ人であると述べている。そして、中村は、一般市民としての視点から、「外向きの期待」と「内向きの期待」という2つの点から臨床心理士に期待していることをまとめている。

「外向きの期待」とは、臨床心理士が、カウンセリングルーム以外の場所で、臨床心理士という専門家がどのように役に立つのかを直接市民に伝え、心理療法という方法に、よりアクセスしやすくすることである。

「内向きの期待」とは、臨床心理学は、ある種異端であるからこそ、公式的な対応・対処では解決できない問題に、一定の解決の道を見いだし得るとも言えるため、外部であり、他者であるゆえに本来の力が出せることを再認識する必要がある。つまり、臨床心理士の社会的認知が進むことで、「臨床心理士の方法に理解のない人は困る」という風に思わないでほしいこと、もう1つは臨床心理士の社会的な認知が進んでいる中で、教育学部の偏差値が医学部に並ぶ事態となっている。そのため、世の中の主流に適応できず心の問題を抱えている人に寄り添う場合に、傲慢であってほしくないというものである。

これらのことから、臨床心理士というものを考えてみると、カウンセリングや臨床心理士はまだ非専門家にとって身近な存在であるとは言いがたいし、医者のような、治療者的で、問題に対する直接的な解決法を教えるような存在としてのイメージがあるといえるのかもしれない。

カウンセリングに対するイメージの違いを非専門家と専門家との間で研究したもので、坂中（2005）のカウンセリングがどのように理解されているかを、一般の大学生と、大学心理教育相談室関係者で修士課程修了以上の心理臨床家との間で比較した研究がある。

この研究では、カウンセリング理解インベントリーを作成し、回答を比較したところ、一般大学生と心理臨床家の間で多くの項目に有意差が見られた。一般大学生は心理臨床家よりも、カウンセリングをカウンセラーからさまざまな指示を出してもらい、何らかの結果が出て、病気が治るという意味での治療効果が出るものという「結果重視」「指示性」「修理モデル」の視点からカウンセリングを捉えていることが明らかになった。また、一般大学生は心理臨床家と比較して、カウンセリングで自由に話し合いながら、自己理解や相互理解を深めていくといった面をあまり理解していないという結果も出ている。この項目に関しては心理臨床家が有意に高い結果となっている。これは心理臨床家がカウンセリングにおいて、クライアントの自発的自己探求や相互理解、そのプロセス自体を成長と捉え重視していることを表していると思われる。

次に、心理臨床家側から見たカウンセリングについて、これまでの研究からまとめてみたい。

カウンセリングについての定義は、カウンセリング心理学が誕生してから現在まで、数えきれないほど多くの専門家がカウンセリングについて論文が発表されてきているが、その中でそれぞれの専門家がカウンセリングを定義しているのもので、カウンセリングについての定義は幾百も存在し、カウンセリングの過程に焦点を当てているもの、カウンセリングの目標に焦点を当てているもの、カウンセリングの技法に焦点を当てているものなど、焦点の当て方によって相違が生まれているようである（渡辺 1996）。

しかし、E.L.Herr と S.Cramer (1988) はどの定義にも共通する要素をつなぎ合わせて、次のように定義している。「カウンセリングとは、心理学的な専門的援助過程である。そして、それは、大部分が言語を通して行われる過程であり、その過程の中で、カウンセリングの専門家であるカウンセラーと、何らかの問題を解決すべく、援助を求めているクライアントがダイナミックに相互作用し、カウンセラーは様々な援助行動を通して、自分の行動に責任を持つクライアントが自己理解を深め、良い積極的・建設的意思決定という形で行動がとれるようになることを援助する。そしてこの援助過程を通して、クライアントが自分のなり得る人間に向かって成長し、成りうる人になること、つまり、社会の中でその人なりに最高に機能できる自発的で独立した人として自分の人生を歩むようになることを究極の目標とする。」

これは、クライアントが一時的に遭遇する困難を、これは言語を用いたクライアントとセラピストの関係性の中で、セラピストの受容的な態度に支えられ、クライアントは自身の在り方を受け止めてもらえることで、自分の特徴を生かし自分の力で社会で生きていけるようになることを援助することを目的としているものと思われる。

これは高良（2006）の言う臨床心理学的援助をクライアントに提供することに相当する

ものであるように思われるが、セラピストが問題行動や、情緒面、不適応行動そのものの治療や、それに対する直接的な解決策や忠告をするのではないことが分かる。

その他の多くの研究や、専門書や一般向けの本の中でも「受容」「共感」といったことが、カウンセリングにおいて重要であることが述べられている。

しかし、このように研究や本の中で述べられていることと、非専門家における臨床心理士やカウンセリングについてのイメージの間には大きく違いが見られるように思われる。

そこで本研究では、もともとは非専門家であった状態で対人援助職を志し、臨床心理学分野に入学した大学院生が、心理臨床家になっていくプロセスにおいて、カウンセリングにおける援助観についてどのような変容を遂げていくのかについて考察していく。

また、臨床心理士養成課程に在籍する大学院生を対象として調査を実施し、相談室でのケース担当前の M1 と、ケースを担当している M2 との間で、援助観がどのように異なるのか比較・検討するとともに、ケース担当等の実習をはじめとする大学院での学びが、大学院生の援助観に何をもたらすのか考察する。

心理臨床家養成に関するカリキュラムや実践技能の学習については、現在報告がなされはじめているが（例えば白石 2007、金坂 2006、伊藤ら 2001、坂倉 1993 など）、大学院生がどのような体験をし、どのような学びを得るかについては、未だ研究がなされていない。そこで、そこで心理臨床養成課程を通して大学院生がどのような援助観を構築させていくかを考察していくことは、臨床心理士養成課程におけるカリキュラムの意義を考える上でも意義のあるものと思われる。

予備調査

Ⅱ. 予備調査

【目的】

予備調査に引き続き実施する本調査において、大学での学びよりもさらに専門的な学びや実践的経験をつむ中で、カウンセリングに対しての援助感に、どのような態度変容が生じるのかを捉えることを目的とするため、内藤（2002）の「自由連想」「多変量解析（クラスター分析）」「現象学的データ解釈技法」の3つを組み合わせ、単一個人の内的世界に関わる認知・イメージ構造を解明する PAC 分析を用いて考察することを意図している。

それに先立ち予備調査では、現在個人がもっているカウンセリングに対しての援助感について、より具体的にイメージできるような連想刺激としての教示文を作成することを目的とする。

また、その教示をもとにして析出されたクラスターから、その援助観をもたらした経験や知識、さらに援助観の変容についてイメージできるかどうかを検討する。

【対象】

研究者本人（M2）。研究者が被験者となる際、PAC 分析の面接は M2 の一人が面接者を担当した。

【調査時期】

調査は 5 月頃、M1 で受講できる臨床心理学分野開講講義の単位をほとんど習得している状態であるが、M2 で受講できる臨床心理学分野開講講義については受講し始めたばかりの状態である（臨床心理学分野開講講義は資料 No.1、No.2 を参照）。また精神保健施設でのデイケア、スクールカウンセラー実習、病院実習を行っている。ケース担当に関しては、相談室でのケースを担当している。

【方法】

内藤（2002）による手続きを以下の順で行った。

当該テーマに関する連想刺激として、「あなたはカウンセリングの中での「援助」につい

てどのような考えを持っていますか？あなたのこれまでの体験・経験・学びを通じて「援助」に対する考え方に生じた変化や気づきについて、頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号を付けてカードに記入してください。」を口頭で述べて教示を行った。カードは 7.5×7.5 の付箋の束を使用し、被験者が思い浮かばなくなるまで自由連想してもらった。その後、被験者にとって重要と感じられる順に番号を記入してもらい、並べ変えてもらった。

その後類似度評定を行う。連想項目間の類似度評定は、ランダムに各項目の対を選び、項目同士がどの程度似ているか、**1－非常に近い～7－非常に遠いの 7 段階評定**で類似度評定をしてもらった。

その後、類似度距離行列によるクラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。作成したデンドログラムを用いながら、調査者と被験者で話し合いながらクラスター分けを行い、被験者によるクラスター構造の解釈やイメージについて聴取を行った。まず、各クラスターごとのイメージ、題名について質問をし、その後各クラスターごとの比較でイメージや解釈の異同を聴取した。さらに全体のイメージや解釈について質問した後、最後に各連想項目単独でのイメージがプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）のいずれに該当するか回答してもらい、面接を終了した。

【結果】

●クラスター1

被験者によるクラスターのイメージと命名

想起順	項目内容	重要順
9	クライアントが言語化できるようになることで、言語化できずに起きていた症状を整理し対処法を探せるようになる	①
18	クライアントの問題を引き受けるのではなく、クライアント自身が自分の問題として引き受けられるようになること	②
1	クライアントの心の成長を助ける	⑬
15	症状を治すのではなく、クライアントの問題が整理できるように手助けすることでクライアントが変わる	④
7	クライアントが自分自身をより理解する	⑦
8	クライアントが自分自身について言語化できるようになる	⑤
3	話の中でクライアントが気づいていない自分を発見し、それをクライアントが受け止めることができるよう手助けする	③
10	クライアントが自分の気持ちをもっと明確に理解できる	⑥
17	クライアントにとって話しやすい場を提供したいと思っていたが、話しを整理できるや自分に気づけることが大切	⑭

以上9項目

被験者による命名:「面接の中で違う視点を持てたこと」

研究者の考察

どちらかという、クライアントの問題を直接扱っていく治療者のセラピストの在り方が、実際のケースを担当していく中で、クライアントを主体としたセラピストの在り方へと変化が見られたものと思われる。関係性ということに注目して考えると、クライアントの問題を直接扱おうとするよりも、クライアントが話したいことに添っていく、クライアントに歩み寄った関係性をとることの方が、面接自体の活性化にもつながるということを体験的に感じ、気づきが得られたものと思われる。

このような治療者としてのセラピストの働きかけ以外に、クライアントにとって有効に働くような働きかけとして、どのような気持ちの在り方で接することが良いのか、模索している様子がうかがえる。

研究者による命名:「クライアントの問題と、直接的でないことからセラピストとしてできることへの気づきと模索」

●クラスター2

被験者によるクラスターのイメージと解釈

想起順	項目内容	重要順
5	セラピスト自身が自分の感じていることを理解し、素直であること	⑧
12	援助するには援助者側も自分自身について理解しなければならない	⑫
4	必ずしも全部受け止めることはない	⑨

以上 3 項目

被験者による命名：「セラピストとしてどう関わっていくか考えたこと」

研究者の考察

クラスター1でも見られたように、クライアントに添ったかたちで、セラピストとしてどのような在り方ができるのかを模索しながら、具体的にクライアントとのコミュニケーションの中で気付いたことについて語られているように考える。これは主に、クライアントとのコミュニケーションの中で、セラピスト側に生じた気持ちをどのように取り扱っていくのかに焦点が当てられている。

またこのクライアントとのコミュニケーションの中には、セラピスト側に生じた気持ちの持つ意味についてどのように言語化していくか、どのようにクライアントに伝えていくのかなど、被験者自身の課題的要素も含まれているものと思われる。

そういった意味で、自分自身の範囲や特徴を確認しながら、セラピストとしてできることを検討している段階ともいえるのではないだろうか。

研究者による命名：「セラピストとしての在り方について」

●クラスター3

被験者によるクラスターのイメージと解釈

想起順	項目内容	重要順
14	「聴く」について考えるようになった	⑩
13	話を聞くときの視点が変わった	⑪
11	前は漠然としていた教科書等で学んだことを、自分の体験に基づいて理解し始めている	⑫
2	クライアントの話をクライアントの話したいことに添って聴くこと	⑬
6	セラピストも感じたことを場合にもよるがフィードバックする。そしてクライアントと一緒に話を進めていくこと	⑭
16	前は直接的なことを重視していたが、必ずしもそうではないのかもと思う	⑮

以上 6 項目

被験者による命名：「聴くことについて勉強したことを自分の体験も交えて考え始めている」

研究者の考察

これまでは学びの中で、書面を通したイメージにとどまっていた事柄で、クライアントとの関わりの中で重要だとされることが、被験者自身がケースを担当しクライアントと関わり、様々なことを体験したことから、その学びが実体験を伴った具体的な意味を持ち、自分にフィットした形で意味づけがされはじめているように思われる。

クラスター3では、特に「聴く」ことについて語られているが、ただ聞くのではなく、クライアントの話に耳を傾け、共感的にクライアントの話を聴こうとしていることが感じられる。そして、その共感的にクライアントの話に耳を傾けることが、面接の基本になることや、そこから構築されるクライアントとの関係性の重要性を体験的に感じ始めているものと思われる。

その他には、クライアントの話を誠実に聴こうとすることは、被験者自身の 1 つの課題でもあるのではないだろうか。

研究者による命名：「持っていた知識が体験を通して具体的なものになったこと」

研究者による語り全体における考察

クラスター1・2・3を通して、ケースを担当してから気づきが得られたことや、考察が進んでいる部分が多く見られ、ケース担当が現在の援助を考える際に大きな影響を与えていることが分かる。

ケース担当前には、セラピストに対して治療者的なイメージを持っていたが、それがケース担当後には、実際にそういった関わりがクライアントとの間で違和感を覚え、クライアントに寄り添った関わり方へと修正を試みようとしている様子が伺える。

また、ケースを担当という新たな1つの経験から、多くの気づきが得られ考察も進んだ一方で、学びが増えることによって、さらなる自分自身の課題が見え、そこから生じる戸惑いやどのようにクリアしていくのか取り組みは始めている様子も伺える。

【この調査で使った手法に関して】

全体を通して、援助を考える際に、ケースを担当という実体験を伴った学びは、これまでの講義等での学びを、より深い理解へと導くものとなっているようだ。ケース担当前は、実体験を伴わない学びにとどまり、具体的でなかったクライアントとの関わりについてのイメージも、ケースを担当して、実際にクライアントと関わっていく上で、より意味をもって再構成していくことにつながっているものと思われる。

その他にケース担当前と後の援助観では、ケース担当前には、セラピストに対して治療者的なイメージを持っていたが、それがケース担当後には、実際にそういった関わりがクライアントとの間で違和感を覚え、クライアントに寄り添った関わりに修正されていったというところも見られている。

「あなたはカウンセリングの中での「援助」についてどのような考えを持っていますか？あなたのこれまでの体験・経験・学びを通じて「援助」に対する考え方に生じた変化や気づきについて、頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号を付けてカードに記入してください。」という刺激文からイメージされた内容は、主に被験者自身が現在担当しているケースをもとにしたイメージであったが、そこから語られる内容の中から、大学院に入ってから援助観がどのように変わったのか、その援助観の変容に大きな影響をもたらしたものはなんであったのかなど、被験者自身の学びや体験が基となり語られることが明らかとなった。

よって本調査で目的としている、臨床心理士養成課程という専門的な学びや実践的経験をつむ中で、カウンセリングに対しての援助感に、どのような態度変容が生じるのかを捉えることができるのではないかと考えられるため、本調査ではこの刺激文を採用し調査していくこととする。

本調査

Ⅲ. 本調査

【目的】

臨床心理士や心理臨床学の研究者を志す者が、臨床心理士養成課程で専門的な学び実践の経験をつむ中で、カウンセリングに対しての援助感に、どのような態度変容が生じるのかを捉えることを目的とするため、内藤（2002）の「自由連想」「多変量解析（クラスター分析）」「現象学的データ解釈技法」の3つを組み合わせ、単一個人の内的世界に関わる認知・イメージ構造を解明する PAC 分析を用いる。そして、個人ごとの態度構造について考察していきたい。

【対象】

教育学研究科臨床心理学分野大学院生、M1 5 名（被験者 A・B・C・D・E）、M2 2 名（被験者 F・G）の計 7 名

【調査時期】

M1 についての調査は、入学して 2 カ月ほど経過した 6～7 月頃に実施し、臨床心理学講義受講のほか、学外実習として精神保健施設でのデイケアの行事参加をしているが、相談室ケースを担当するには至っていない。M2 についての調査は 9～10 月頃、臨床心理学分野開講講義の単位をほとんど習得している状態であり、精神保健施設でのデイケア、スクールカウンセラー実習、病院実習を行っている。また病院実習、相談室では、それぞれがケースを担当している。（臨床心理学分野開講講義は資料 No.1、No.2 を参照）

【方法・手続き】

予備調査と同様に内藤（2002）による手続きを以下の順で行った。

当該テーマに関する連想刺激として、「あなたはカウンセリングの中での「援助」についてどのような考えを持っていますか？あなたのこれまでの体験・経験・学びを通じて「援助」に対する考え方に生じた変化や気づきについて、頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号を付けてカードに記入してください。」を口頭で述べて教示を行った。カードは 7.5×7.5 の付箋の束を使用し、被験者が思い浮かばなくなるまで自由連想してもらった。その後、被験者にとって重要と感じられる順に番号を記入してもらい、並べ変えてもらった。

その後類似度評定を行う。連想項目間の類似度評定は、ランダムに各項目の対を選び、項目同士がどの程度似ているか、**1－非常に近い～7－非常に遠いの 7 段階評定**で類似度評定をもらった。

その後、類似度距離行列によるクラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。

作成したデンドログラムを用いながら、調査者と被験者で話し合いながらクラスター分けを行い、被験者によるクラスター構造の解釈やイメージについて聴取を行った。まず、各クラスターごとのイメージ、題名について質問をし、その後各クラスターごとの比較でイメージや解釈の異同を聴取した。さらに全体のイメージや解釈について質問した後、最後に各連想項目単独でのイメージがプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）のいずれに該当するか回答してもらい、面接を終了した。

IV. 結果

IV. 結果

事例の守秘にかかわる部分であるため、本稿には研究者が各事例を簡略にまとめたものを記載する。詳細については、研究者本人もしくは修士論文を所管する講座までお問い合わせください。

M1 の結果

《被験者 A の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
隣で見守る、支える (7 項目)	セラピスト側の関わりとして、クライアントに対して何か働きかけるよりは、クライアントが持っている力を信じて見守る、支えるといった関わりをしたい。	クライアントを尊重する、謙虚であろうとする姿勢

研究者の考察

クライアントと向き合う時のセラピストの姿勢について、人と人との関わりということを重視していると思われる。またクライアント自身が持っている力をセラピストがとても信頼し、そこに役割に当てはまらない一人の人間としてのセラピストというあり方がうかがえる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
クライアントを理解し ようとする事 (2項目)	クライアントと向き合う時のセラピストの基本的姿勢。クライアントに対して誠実意に 向き合うことで共感的な関わりができるよ うに思う。また、クライアントと向き合うこ とで、セラピスト側の内面が活性化されるよ うに思うが、その生じた感情に対しても率直 でありたい。	セラピストの心の 中での動き

研究者の考察

クライアントと向き合った時のセラピストが誠実性と共感的であるという姿勢が感じられる。その反面、セラピスト自身自分に生じる気持ちを感じたり、それをクライアントに
どうアプローチしていくことができるかなど、セラピストの内面が活性化されているところ
で、共感的であることとの差異も感じられる。いずれも実習や非専門家との関係の中で
感じたことを、面接場面を想定する際の資源となっているものと思われる。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
クライアント自身の気 づきとそこからの成長 (2項目)	面接場面で行われるクライアントとセラピ スト間のやりとりを通して、クライアントの 抱える問題や対人関係における基本的態度 が表れてくるように思う。それに対してセラ ピストは、どのようにクライアントが気づき を得ることができるような働きかけができ るのか。	クライアントとセ ラピストの相互作 用が治療的要素を 含むこと

研究者の考察

面接場面で何ができるのかということに対して、具体的なイメージを想定しているように思われる。そしてそのできることを、「練習場、学ぶ、気づく」というような言葉で表現している。クラスター1・2 に比べてセラピストの態度以外にセラピストの働きかけの要素が多くなっているように感じられるが、あくまでもセラピストの在り方が、指示や教育といった父性的な関わり方ではなく、クライアントの感情を受け止め、気づきが得られるような母性的な関わり方であるように感じられる。また感情を受け止めることや気づきが得られるようなセラピスト側の関わりの背景には、セラピスト自身に生じた率直な感情があるのではないだろうか。

●クラスター4

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
セラピストの専門性 (2 項目)	セラピストの技術やセンスといった面における、専門性について。	専門家として果たすべきこと

研究者による解釈

セラピストが面接で果たすべき役割や関わり方というとマニュアル的な印象を受けるが、クライアントを理解する際に柔軟に関わるなど、セラピスト個人のセンスや *feeling* を重視している。マニュアル的な部分とセラピストのセンス的な面は相反するものが含まれているように感じられるが、セラピストの技術として 1 つのイメージとしてまとまっているようだ。また、この面接で果たすべき役割や関わり方におけるセンス、*feeling* の 2 つの要素は、被験者が面接を行う上で、最終的に到達したいと考える目標としては共通する部分であると思われる。

クラスター4 は、いくつかの要素が複合しているようにも思われるため、今後の学びにより明確化の余地が残されているように思われる

研究者による被験者 A の語り全体における考察

全クラスターを通して、人としてクライアントと関わり尊重していく態度を重視するということが感じられたことについて、この被験者の特徴であると思われるが、その中でも特にクラスター1・2・3では受容的であること共感的であることなど、セラピストという役割にとらわれない個人としての基本的な在り方が根底に見られた。それをもとにクライアントを理解するために内的に活性化される部分や、どうそれを伝えていくか、関わっていくかを非専門家との関係経験したことを資源として想定しているように思われる。

クラスター4は他のクラスターとは少し異なり、心理学での学びが多く含まれるクラスターであるように思われる。学びをもとにセラピストの資質のようなものを考えながらも、クライアントの考え等に先入観や偏見を持った関わりでなく、柔軟に関わりたいということも語られているため、被験者の基本的な態度と学びとのすり合わせをしながら模索している段階なのではないかと思われる。そのため、クラスター4は今後の学びにより明確化の余地が残っている部分ではないだろうか。

《被験者 B の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
複合 (3 項目)	セラピストのクライアントに対する関わり方として、指示的・「ヨコ」的・支持的の 3 つの関わり方があるように思う。	クライアントとセラピストの関係性

研究者の考察

ここでのイメージは、セラピストのクライアントに対する基本的姿勢として、下から支えつつも見守るという「横」「下から上」の立場が取られるが、場合によっては支持的になることも考えられるという、カウンセリング場面における、セラピストが取りうるクライアントに対するいくつかの姿勢について想起されている。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
母親的 (3 項目)	クライアントに対する関わり方について、専門家や非専門家との関わりを通してより明確になったと感じる部分。	クライアントに対する受容的態度

研究者の考察

クラスター2では、クラスター1でいくつか挙げられたクライアントとセラピストの関係性の中でも特に「母親のイメージ」について語られた。この母親的な関わりが被験者の援助観につながっていることに関して、これまでの日常生活の中で、どっしりと全部受け止めてもらえるような感じ、包み込まれるような感じ、同じ視点から見ている、話していると感じられる体験を被験者自身が他者との関係の中で体験し、支えられたと感じたことから、その経験が基となり、被験者自身の中でより具体的なイメージとして、横の関係や、もしくは下の関係から関わろうとするものに変化していったのではないかとと思われる。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
高慢な感じ (2項目)	セラピストがクライアントに対して何かしようとする態度は、クライアントのことをセラピストがすべて理解している、というような侵襲感をクライアントに与えるかもしれないことや、セラピストがクライアントの問題を背負い込むような危険性をはらんでいるように思う。また、「助けてあげるよ」という言葉は、一方的な援助のように感じられるため、高慢であるように思う。	セラピストの在り方における危険性

研究者の考察

これまでのクラスター1・クラスター2でもあるように、クライアントとセラピストの関係性の中で、特に母親的な受容的態度を重視し、指示的な関係であることは時として必要であると認めるにとどまっている被験者にとって、クラスター3で語られたような関係性は、セラピストの驕りとなるような危険性をはらんでいるように感じた。そのためセラピストの意図しない関係性も、セラピスト自身の気持ちのありようで、高慢で権威的になりうるのかもしれないので、そうならないよう自分自身の戒めとして現れたのではないだろうか。

研究者による被験者Bの語り全体における考察

クラスター2とクラスター3の比較の部分でも触れたように、クライアントとの関係に対して枠決めの調整を行っていることに加え、被験者にとってはクライアントもしくは他者に対して良かれと思っての行動や発言を受け取る側はどう感じるのか、という自分の感覚の整理をしているように感じられた。

《被験者 C の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
今の自分の中に あるもの (10 項目)	心理学を学んだことで、セラピストに対する 万能感がそげ落ちていった。現段階でセラピ ストがクライアントに対してできることと して、クライアントに対して意図的に働きか けるよりは、クライアントがなおろうとする ことを手伝うことや、寄り添うこと。	現段階で自分が セラピストとして できることへの イメージ

研究者の考察

心理学を学ぶ前に持っていたカウンセラーの対する万能イメージが、専門的なことを学
ぶにつれてどんどん万能的なイメージがそげ落ちていく感じを受ける。

また万能的イメージがそげ落ちたことは、セラピストは面接で一体どんなことができるの
かという問いとの直面でもあったのではないだろうか。まだそれについての具体的な答え
はまだ模索している様子がうかがえるが、クライアントが無力な存在ではないこと、セラ
ピストが治すのではないなど、クライアントに対するイメージの変化も感じられる。それ
を踏まえた上でセラピストは何ができるのかを模索している段階ではないかと思われる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
過去の自分の中に あったもの (3 項目)	心理学を学ぶ前に持っていたセラピストに 対するイメージは、たとえるならば医師であ り、クライアントの抱える問題に対して、直 接的で即効性のあるアプローチができるよ うに思っていた。	セラピストに持つ ていた万能的 イメージ

研究者の考察

心理学を学ぶ以前に持っていたセラピストの万能的イメージの例として、外科医があげられるが、クライアントの問題に対して、薬や手術のような処置の仕方をセラピストが持って、人と人との関係というよりは治療が重要視されている。

しかし、大学院での事例検討会に参加するなどによって、クライアントとセラピストの関係が治療だけの関係にとどまらず、生きた人と人との関わりであるなど、クライアントとセラピスト間の関係性に対するイメージの変化があったように思われる。

研究者による被験者 C の語り全体における考察

心理学を学ぶ以前に持っていたセラピストの万能的イメージの例として、外科医があげられるが、クライアントの問題に対して、薬や手術のような処置の仕方をセラピストが持って、人と人との関係というよりは治療が重要視されている。

しかし、大学院での事例検討会に参加するなどによって、クライアントとセラピストの関係が治療だけの関係にとどまらず、生きた人と人との関わりであるなど、クライアントとセラピスト間の関係性に対するイメージの変化があったように思われる。

《被験者 D の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
内面の作業 (6 項目)	クライアントとのコミュニケーションの中で、セラピストがクライアントを理解するために、内面で解釈したり、いくつかの仮説をもって関わる。	面接で起きること への模索

研究者の考察

クライアントの話を聞いていく中で、セラピスト自身の内面に起こることについてまとめられている。ただ、セラピストの内面に起こることは感情というよりはクライアントの話を理解することに焦点が当てられているように感じる。

また、クライアントの話を理解することでどのような展開になっていくかについてはまだ模索中であるようだが、クライアントの主訴や状況、気持ちなどをまず理解することに努めようとしており、それが面接を想定する際の資源となっているように思われる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
方向性の確認 (1 項目)	特定の心理療法を試みることや、診断すること。場合によっては、その内容をクライアントやその家族に対して示す場合もあるように思う。	面接場面の中の directive なイメージ

研究者の考察

どんな心理療法を使うのか、またその診断内容をクライアントやその家族に伝えなければならないような場面について考えてみると、面接を進めていく中でクライアントとセラピスト間で共通の理解をもとに面接を進めていくような、歩調を合わせるような捉え方も考えられるが、どちらかというとい医療的、もしくは治療者的なセラピスト像が想像される。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
援助者の姿 (1項目)	クライアントが援助を求めなければ面接は始まらない。また、クライアントが望んでいない働きかけは援助にはならない。	援助者とは何か についての模索

研究者の考察

「求められる」ということは、クライアントとセラピストの関係性において、セラピストが上の立場であるということではなく、クライアントあつてのセラピストであり、またクライアントから求められることに応えたいというような感じを受ける。クライアントの役に立ちたいという気持ちが感じられる一方で、クライアントが望んでいる形でそれを伝えられるか、面接が進んでいく中でクライアントのメリットにならないものもあるかもしれないなど、自分にできるかどうかの不安や葛藤などもあるように感じられる。

●クラスター4

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
変化の過程 (4項目)	面接場面でセラピストの働きかけにより、クライアントが様々な体験をし、変化が生じる。セラピスト側の働きかけには、積極的な働きかけ以外にも、ただひたすら話を聴くなどの受動的な働きかけも含まれる。	変化が生じるまでにクライアントとセラピスト間で起きること

研究者の考察

変化が感じられるまでと、面接の中でクライアントとセラピストがどのような時間を過ごすのかの間が非常に漠然としていて、まだ面接の中で起きることに対するイメージを模索中であるように思われる。

大学院に入ってから講義が、変化が感じられるまでの過程を想像することに強く影響を及ぼしている。またクライアントに対して、セラピストとしてどんな関わり方ができるかを考えた時に、何か特定の心理療法を試みることや受動的にひたすらクライアントの話を聴くという、体験的なものというよりは知識から面接を想像していることがうかがえる。

研究者による被験者 D の語り全体における考察

セラピスト主体のイメージが多く語られていることから、面接においてセラピストにできることを模索していることが感じられる。またクライアントあつてのセラピストでもあることから、自分自身の在り方というよりは、セラピストとしてクライアントの求めることに対してどう応えていくことができるかということへの模索が強く感じられる。

そして、これまで漠然と持っていた面接場面でできることは、講義や実体験を通してより具体的なイメージを持つことへつながっている。現段階では、ケース担当前ということもあり、クライアントとの関わりやその中で生じるコミュニケーションや感情への扱いの意味づけには至っておらず、面接の中でできることへの模索が主であるように思われる。

《被験者 E の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
大学院に入ってから直面したり気づいたこと (2項目)	クライアントと対峙しているときにセラピストが揺さぶられる。大学院の学びで、面接においてクライアントのことだけを扱うわけではなく、セラピストに生じる揺さぶられ感なども相互に扱っていく必要があるという気づきを得た。	自分と向き合うことから生じる揺さぶられ感への対処の模索。

研究者の考察

大学院の事例検討会でのケース発表の中で、クライアントについてだけでなくセラピスト側の気持ちも扱われていたことから、面接において考える対象となるのはクライアントだけでないことに気づきがあったように思われる。これは被験者にとってこれまでなかった気づきであった。

また学部の時にはなかったような、臨床についての深い講義や実習での実践的な経験も被験者にとってこれまでのイメージとは異なる臨床についての側面でもあったようだ。これらのことから面接やクライアントと実際に関わることに對して不安や揺さぶられる感じが生じているが、その反面、自分自身の不安や揺さぶられ感と向き合おうとしている様子もうかがえる。具体的な対応策は見つかっていないものの、これは自分自身への気づき、自分自身へ生じた感情を受け止めはじめたところではないかと思われる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
よりはっきりした関わり方や見方についての感じたこと (2項目)	同じ主訴であっても、クライアントによって性格や様々なことが異なるため、一定の関わり方をすればいいわけではない。クライアントによって柔軟に対応していく必要があるように思う。	クライアントとの関わり方に対してより明確化した気づき

研究者の考察

援助方針やクライアントの理解の仕方なども含め、クライアントとの関わりという大きな捉え方で、主訴、似たような事例であるから同じような関わりをしてうまくいくということではなく、そのクライアント個人として向き合い、どのような関わり方をしていくかを考え、そのクライアントに対する理解を深めていく。このような学部の時も持っていたが漠然としたイメージが、大学院での講義や実習での体験からより明確になってきたものと思われる。ただどちらかという実体験から感じたというよりは、講義の中で明確化してきた部分が強いせいか、全体的に具体的なイメージとは結びついていないように感じるため、今後の学びやケースを持つことで大きく明確化の余地を残している部分でもあると思われる。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
関わるときの自分の心構えと姿勢 (2項目)	ケースを担当することを想定した際、これまで非専門家との関わりの中で感じたことを、ケースに生かしたいと考えていること。	自己への気づきで明確化している部分

研究者の考察

面接でクライアントとコミュニケーションをとることを想像したときに、自分に足りないと感じられる部分について具体的に気づきがあり、その対応策としてどのようなことができるかについても具体的に考えを進めている。これらは日常生活の中での非専門家との関わりから感じていたことでもある。またそれについての具体的な対応策も非専門家がモデルとなっているように感じられる。

研究者による被験者 E の語り全体における考察

全体を通してケースを持つことを想定したイメージがある。またその想定したイメージの中で、ケースに対する自分と向き合うことから生じる不安が共通して見られるように思われる。

クラスター1 やクラスター3 では被験者自身の気持ちの面、つまり面接場面におけるセラピストの在り方に対する模索が行われているように考えられる。クラスター2 も面接場面で行えることについての模索という点では共通する部分もあるが、面接というものに対するイメージがまだケース担当前ということもあり、想像の域にとどまり漠然とした部分が多いように思われる。

M2 の結果

《被験者 F の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
今の自分のケースに対する姿勢 (4項目)	クライアントに面接がどのような形で役立つものになるのかを考えながら、クライアントに寄り添おうとしている。	クライアントのために自分がどうあるべきか、何ができるかを考え取り組んでいること

研究者の考察

クライアントの直接の問題というよりは、資源や他のところからのアプローチにより、クライアントそのものを受容していくというセラピスト像が感じられる。面接においてもセラピストが主導権を握るのではなく、クライアントに委ね、セラピストはその流れに付き合っていく姿勢をとろうとしているように思われる。そしてこういった関わりの中で、クライアントが日常生活を送っていくためのエネルギーにつながればということを目指している。またセラピストという役割から抜け、自分自身がどうあるかを意識してるように思われる。

これらのことは実際のケースでの関わりの中で、自分がしたいこととそのフィットしさの中から、何ができるのかどう関わっていったらいいのかを模索しながらも取り組んでいることのように感じられる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
とまどい、今後の課題 (3項目)	クライアントとのコミュニケーションの中で、自分が考えるセラピストとしての役割と、クライアントから望まれているセラピストの役割の違いの間で戸惑いが生じている。このことについて、今後どのようにクライアントと関係性を築いていくか模索している。	面接場面での クライアントとの 関係性から生じた セラピストの混乱、戸惑いとの直面

研究者の考察

年下のクライアントとの関わりから、「友達のような存在」としてのセラピストのイメージがあったが、年上のクライアントとのケースを持ったことによって、それまでセラピストの在り方、関係性ではうまくいかないような部分も見え始めたような感じを受ける。またクライアントから強く援助やアドバイスを求められることで、セラピストの役割に押し込められるようで不自由さも感じつつ、それに応えられないことで、クライアントにとって役に立たない存在になってしまうことへの不安も生じているのではないだろうか。

そういったこれまで担当したケースと異なるタイプのクライアントとの対峙により、セラピストが自分自身の課題を見つけ戸惑いを感じている。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
理想と現実 (3項目)	面接において、クライアントの役に立てているかどうか確信が持てず曖昧な中で、「治療者」ではない立場から、クライアントに役立てるような形を模索している。	カウンセリングにおけるセラピストの想いと、実際には何ができるのかについての問い

研究者の考察

面接をするにあたり、クライアントの役に立ちたつために何かをしたいという気持ちが根底にありつつも、実際にケース担当しその経験から、セラピストとしてできることへの限りがあることに気づきを得たように思われる。セラピストとしてできることについては主に漠然としたイメージにとどまっているが、セラピストの何かしたいという気持ちを、ケースごとのクライアントとの関わりから、そのクライアントに合った形に変換しできることを発見し実践してる。

研究者の考察

項目5の「クライアントの役に立つ」ことが中核部分にあり、それを面接場面に当てはめた場合、必ずしもそれがクライアントのニーズではないかもしれないことを実際のケース担当の体験から感じたようである。そのことはセラピストにとってはクライアントにとって役に立たない存在であることへの不安ことや、自分自身の無力感などを感じさせるものであったようにも考えられる。そのため、クラスター3は役に立ちたい気持ちとそれができないかもしれない気持ちが混合しているのではないだろうか。

ただ、役に立たない存在であることへの不安や自分自身の無力感は、クラスター1の中では、セラピストという役割に当てはまらない個人としての在り方を考えるきっかけともなり、また個人としてクライアントに寄り添うような関係性を築いていく上での原動力ともなっているようにも思われる。

クラスター2ではケースを担当して間もないこともあり、クライアントに沿った関係性はまだ模索中であるが、出会うケースによって自分の課題を発見し、セラピストの在り方やクライアントとの関係性についての理解を深めていっているようにも思われる。

《被験者 G の事例》

●クラスター1

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
面接の初期 (2 項目)	面接の初めの段階で、クライアントに適切な援助が行えるように見たてることや、他機関との連携を持つことも重要であると思う。	どこで援助を行うことができるのか、どういった関わり方ができるか、面接を行う前にまず考えること

研究者の考察

面接を行うにあたって、その機関ごとにできる関わりからまずクライアントにあったものを見立てるという視点であるように感じられる。必ずしも被験者自身がそのクライアントと関わりを持っていくことを前提とした立場ではなく、クライアントに何ができるのかを重要視しているように思われる。

●クラスター2

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
面接をやるにあたって自分としては大事にしていること (12 項目)	面接において、特定の心理療法や、クライアントと関わる上で大事だと感じたこと、面接を終えた後に振り返りその意味付けをすることなど、大学院での学びや経験を通してより体験的に重要と感じたこと。	知識と経験との照らし合わせの中で自分にフィットしたもの

研究者の考察

このクラスターでは、ケースを担当して感じたことで、面接をやるにあたって自分としては大事にしていることとしてまとまっている。しかし、クラスターについてのイメージが語られる際、さらに 3 つに分けた援助観が見られた。この 3 つのクラスターを、これまでの学びとケースを担当した経験から、被験者自身にフィットした理論的な部分と、セラピストとしてどうあるかという態度について、そして面接を振り返り感じたことの 3 つに分けた見方も考えられるのではないだろうか。そこで、この 3 つは分化しつつあるが、有機的な関係性がまだできておらず、混沌とした部分であるように思われる。

●クラスター3

被験者による命名	内容のまとめ	研究者による命名
面接を行うことでの無力感 (6項目)	実習やケースを担当したことで、これまでと違ったカウンセリングの一面が見え、カウンセリング自体でできることについて模索している。また、今後補っていきたい部分や、改善していききたい部分など、自分自身の課題も見えてきた。	自分自身の カウンセリングで 何ができるのか への問い

研究者の考察

相談室でのケース担当以外での実習での体験から、カウンセリングで何ができるのか、セラピストとしてどのように在ることができるのかなどについての疑問が生じ、そのことについて模索しているように思われる。

またケース担当や他機関での実習からの学びは、自分のできなさを目の当たりにすることにもなったように感じられる。それも含め、カウンセリングで何ができるのかについて思いを巡らせているように思われる。

研究者の考察

面接の始めと終りと振り返りという 1 つの面接の流れ以外にも、クラスターごとに他機関での実習から感じた戸惑いや疑問、無力感など、それ以外の意味が含まれているように感じられた。また 1 つのクラスターの中にもいくつかのイメージの意味が含まれているなどして、分化しつつあるが未だ混沌とした部分も見られた。

そしてその機関ごとにカウンセリングに求められるものの意味の違いや、現在担当しているケースで感じた、補っていきたい部分、学びや経験により生じる戸惑いや疑問など、課題を見つけ取り組んでいるように感じられる。

V. 考察

V. 考察

(1) M1 について

全体を通して、セラピストとしてどうあるべきかを、これまで心理学から学んだことと非専門家との関係性から体験したことを資源として理解しようとしている印象を受けた。しかし、まだ相談室のケース担当前ということもあり、クライアントを想定する際の資源は被験者が非専門家との関わりの中から体験したことにとどまっている。

セラピストとしてどのような関わり方ができるのかといった模索や、その模索する自分の在りようなど、自分自身の内面に向かう考察が進む一方で、クライアントとの関わりや、その中で生じるクライアントとのコミュニケーション、クライアントの感情の扱いに対する考察はあまり進んでいないように思われる。

これらのことを岡嶋（2002）の研究に当てはめて考えてみたい。この岡嶋の研究では、下山（2001）が述べている、資格認定協会のカリキュラム案を紹介するにあたり、社会的役割・機能としての専門性の学習に関する“専門活動”、心理学的な臨床実践に関する“実践活動”、有効な実践を行うための研究に関する“研究活動”の3点が挙げられているが、その中でも大学院修士課程の学習の中心となるのは、実践活動における技能学習であることから、臨床心理士養成課程に関する実践技能の学習が果たしうる役割について検討を行っている。

しかし実践技能の学習がいくら重要であっても、クライアントとの面接をいきなり始めるわけにはいかないため、その初期段階として、カウンセリングのビデオテープを視聴することや、学習者同士や学部生を相手にしたロールプレイングなどの模擬的実践を行うなどの研修を通して、臨床実践に必要な面接技法や心理臨床家としての態度を学ぶことが求められるとし（東山 2001）、日本心理臨床学会大学院カリキュラム委員会の報告（鶴 2001）によると、“臨床技法体験実習”という実習科目にて行うことを提案していることから、岡嶋は心理臨床家養成課程における心理劇実習に着目した研究を行っている。

そしてその心理劇の5要素（演者・観客・舞台・補助自我・監督）の立場を体験することで、①自己理解・自己成長、②心理療法の効果に対する影響要因の検討、③自己の臨床観の自覚・形成の3つの点について研修することを述べているが、大学院での講義や実習様々な体験も、心理劇実習と同様に、①自己理解・自己成長、②心理療法の効果に対する影響要因の検討、③自己の臨床観の自覚・形成の体験をもたらしているものと思われる。

①自己理解・自己成長については、演者体験や観客体験により、対象者は自己分析深化や感情表出があり、自らの内的世界を体験するという結果が出ているが、本研究におけるM1の語りからも、同様の体験が語られたように思われる。それは、セラピストとしてどうあるべきかについて思いを巡らせている点が共通して見られたことがその理由の1つと

して挙げられるだろう。日常生活や講義・実習での体験は M1 の被験者たちの自らのセラピストとしての在りようへの気づきをもたらしている。

さらに具体的に述べるとすれば、どの被験者もセラピストとしての在り方への気づきは得られているものの、自己発見や再確認は被験者によって程度の差が見られ、これまでの非専門家との関わりから、明確に自己について発見や再確認できている被験者もいれば、再確認までには至らず、これまでセラピストに抱いていた万能的イメージは当てはまらないことに気づき、そこからセラピストとしてできることへの模索を展開し始めた被験者も見られた。また大学院での講義や実習が、面接場面での自己の在り方を深く模索する契機となった被験者も見られた。このような点からも臨床心理士養成課程での学びは、被験者にとって、これまで学びや経験がより具体的意味をもったり、より自己理解・自己成長を深める体験をもたらすものと思われる。

②の心理療法の効果に対する影響要因に関しては、対象者が心理劇演習という自己の体験を通して、その要因を「役割の性質」「周囲（観客や監督）の存在とあり方」「補助自我的な演者」「舞台づくり」など様々な視点に求め仮説を生成しているという結果が出ている。本研究の M1 の被験者の語りの中からは、特に関係性を重要視した面接の展開がクライアントにとって治療的效果をもたらすという立場や、面接の構造をはっきりさせ、受容的ではあるが指示的にも関わることが治療的效果をもたらすという見方の 2 パターンが見られたように思われる。この見方の違いを考えたところ、非専門家との関係を面接場面に置き換えて面接を想定している被験者から、関係性を重要視するという傾向が見られ、講義や実習からの学びを主に面接場面を想定する資源としている被験者からは、面接構図の明確化、支持的な関わりを考える傾向が見られたように考える。

これを本研究で現れた、M1 のこの時期の特徴の一つとも言えるであろう、被験者がセラピストとしてどのような関わり方ができるのか、そしてその気持ちの在り方についてなど、個人としての感覚の整理についての考察が進んでいること、セラピストとしての在り方を模索し始めることに注目して考えてみたい。

M1 の被験者の語りから、大学院での学びや、日常生活での非専門家との関わりを資源とし、セラピストとしての在り方、面接を想定していることが共通して見られたが、そのセラピストの在り方の考え方を詳しく分類して考えてみると、被験者によってどの立場からセラピストの在り方を考えるかについて違いがあるように思われる。また、面接を進めるにあたって、様々な立場の視点からいくつもの仮説が生成されていったのではないかと思われる。

一つ目は、面接の想定する際の立場被験者自身が、「もし自分がクライアントだったら」というクライアントからの視点から、クライアントに歩み寄るという意味でのセラピストの在り方を模索するものである。そしてそのようなクライアント的視点から見て、居心地の存在であるセラピストとの関係性から面接を構成していきたいとするものである。たとえば被験者の一人は、これまで自分がよい関係だった専門家や非専門家との関係において

は、自分が包み込まれるような体験をしたと語っている。また、これまでの自分の体験を通して、「もし自分がクライアントであるならば…」といった視点を持ち、クライアントの視点に立ったセラピストの在り方や、クライアントにとって脅威とならないようなセラピストの在り方を模索しているものと思われる。

二つ目は、面接を想定する際に、セラピスト側の立場の視点からではあるが、これまでの非専門家との関係や体験から、自分自身についての特徴や気づきが得られたり、周囲との関係から、どのような接し方が相手にとっていいのかといった視点から、セラピストの在り方を模索するものである。これは複数の被験者に見られ、大学院での学びを自分自身のこれまでの経験と照らし合わせ、自分自身についての気づきからセラピストの在り方を模索しているところから伺える。

三つ目は、専門的な知識に基づく、面接を構築し、セラピストとしての働きかけをしつかりと行っていきたいという、心理臨床の専門性を十分に参照し、実現しようとする在り方である。被験者の一人は、これまでの非専門家との関係よりというよりは、大学院での学びが面接を想定する資源となり、そういった知識的部分からセラピストの在り方や面接の枠組みを捉え、専門家としてどのようなことができるのかといった視点から、セラピストの在り方を模索している。

次に、③の自己の臨床観の自覚や形成に関する体験については、個人の体験を面接場面に置き換え、積極的にセラピストの在り方を探求している在りようが見られたという結果が出ているが、これは本研究における M1 の語りの中でも多く語られた部分であるように思われる。これまでも述べてきたように、大学院での学びや、実習、非専門家との関わりを通して体験し感じたことを、面接場面に当てはめながら、どういった関わりがクライアントにとっていいのか、そのためには何ができるのかといったことが根底に見られ、各々が自分なりの視点を持って、セラピストの在り方を模索しているものと思われる。

(2) M2 について

ケース担当や実習での実際の体験を通し、学びが増えていくことで、多くの気づきや新しい視点をもたらすこととなっているが、その反面、学びが増えていくことで混沌としてくる部分も生じ、自分自身への無力感や、面接でセラピストとして何ができるかについての課題が見えてくるなど、学びや経験は、気づきや新しい視点以外にも課題や未分化な部分を鮮明にしているものと思われる。

M2 の語りの中では、学びや経験により、新たな課題と直面し、取り組んでいる様子が伺える、いずれも共通して、セラピストとして自分に何ができるのかを考えるきっかけともなっているように感じられる。

たとえば被験者の一人はケースを通して、自分の苦手な部分や、どのようにしてクライアントに共感していることを伝えていくかなどの自分自身の課題に気づきを得、どのようにそれを達成していくかを模索している様子が伺える。

また、実際のケース担当や実習先での経験から、セラピストにできることの範囲やカウンセリングでできることについて、ケース担当以前に比べてさらに狭まり、それによりセラピストとして役に立たないことへの不安を抱えながらも、その中でも自分にできることや、自分自身の在り方、クライアントのニーズにどのように応えていくかを模索しているように思われる。

たとえば被験者の一人は、クライアントとの関係の中で、自分がやりたいことが必ずしもクライアントの望むことではないかもしれないという気づきを得、クライアントが話したいことを一生懸命に聞くことや、セラピストの在り方として、治す存在ではなく、そのクライアントにフィットするかたちで沿おうとする存在であろうとしている。

M2 の語りの中で共通している点として、考えても明確な答えは得られず、めざすべき目標が漠然としていることから生じてくる不安や無力感が背景にありつつ、それでも自分自身の課題が見据え、それに取り組もうとしていることがあげられる。東山（1986）は、カウンセリングをやっていくうちに、容易に治らないし、深まらないし、なかなか手がかりもつかめず、カウンセラーもクライアントも焦ってくることがあると述べている。また河合（1970）も、「誰かが悩みをもって来たときに、私がこの人のために、現在できる最善のことは何かをまず考えることがカウンセリングの出発点である」と述べている。

M2 がこのような不安や無力感が生じつつも、それでもクライアントのためにできることは何かを模索し揺れ動く態度は、心理臨床の世界に、その一員として踏み入った者として正統なスタートラインに立ったと考えてよいのではないだろうか。

セラピストの不安や戸惑いについて他の視点から考えてみると、カウンセラーは医者とは異なるし、大学での相談室のケースでは治療者といった立場を強く出してはいないように感じる。そこでクライアントの問題が改善されることを望んでいるものの、治すといってしまうと、クライアントの主体性や可能性を発見することがなくなってしまうし、か

いって全くの非治療者かというそうではなく、クライアントとの関係は専門的な関係である。そういった関係の中で揺れ動いているように思われる。さらに、クライアントのために自分にできることをしたいという気持ちとは裏腹に、1週間に1回1時間、もしくは2週間に1回というという時間的制約や決められた場所以外では会わないなど非常に強い制約がある。このような二律背反的な設定の中でゆれ動きながら、セラピストとしての自分なりの在り方を確立していくことも臨床心理士養成課程における課題であるのかもしれない。

また、セラピスト側からクライアントに対してどのように働きかけていくのかといったことに関しても、クライアントの役に立ちたいという能動的な働きかけと、それよりは受動的である、何かしようとするのではなく、クライアントに合わせて、寄り添っていこうとする受動的な働きかけとの間で揺れ動いている様子も伺えた。

氏原（2002）は、カウンセリングをしようということ自体、クライアントの役に立とうとする能動的な働きかけであり、クライアントによくなってもらいたいとする、カウンセラー側の積極的な働きかけに他ならないと述べているように、クライアントに何らかの働きかけをすることも、クライアントに寄り添おうとするところにも、セラピスト側にとっては、どちらもかなりの能動性があるものであらうと思われる。

よって能動的であっても受動的であっても、その根底に感じられるのはやはり、どのようにクライアントの役に立つて行くかという課題であるように思われる。そこで M2 においては、クライアントの反応を見ながら、クライアントによりフィットするかたちでセラピストはどのような関わりができるのかを模索している段階なのではないだろうか。

M2 の語りの中から、ケースを担当することで不安や無力感が生じている様子が伺えるが、面接において恐怖感や・不安感が生じるのはクライアントも同様であり、カウンセリングを受けることによって、それまで表面に出ていた問題でバランスを保っていたものが、より問題の背景へ向かっていくことへ一種の不安や恐怖感を引き出すと河合（1970）は述べている。

もしかすると、面接を行っている時にセラピストが感じる手ごたえのなさの背景には、こういったクライアントの問題の背景を深めることで生じる、クライアントの不安や恐怖感への抵抗が潜んでいる可能性も考えられる。今回の語りの中では、主に関係性やセラピストの在り方、自分自身の課題について主に語られたように思うが、面接に対してセラピストが感じた不安や手ごたえのなさについての考察が、自分自身の無力さ以外の理由の幅が広がっていくことを実際の経験の中で体験し、考察を深めていくことは今後の課題とならうのではないだろうか。

VI. 総合考察

VI. 総合考察

M1・M2 全体の語りを通して、セラピストとしてどうあるべきか、面接において何ができるのかを模索している印象を受けた。しかし、M1 はまだ相談室のケース担当前ということもあり、クライアントを想定する際の資源は被験者が非専門家との関わりの中からの体験したことにとどまっているが、その中でも、セラピストだけではなく、クライアントや観察者といった様々な立場から、面接を想定しているような印象を受けた。

M2 はケース担当や実習先でのクライアントとの関わり等から、面接においてセラピストとして何ができるのか、また自らの未熟さに対する自覚や無力感なども体験している。台(1990)は、心理臨床の目標について、クライアントが自分なりの「ところを得る」ことでの自己実現に至り、それにともなって社会そのものを一層発展し、そのことでまたクライアントの自己実現が広がるようになることを達成するための方法の特徴として、心理臨床家が(1)クライアントに何らかの「関わり」をもち、(2)「情的・理的構え」に基づいて、(3)特定の社会的な「枠」に拠りながらクライアントの主体的充足を促すと述べているが、その(1)でも述べられているように、面接の初期段階、あるいは全過程を通して、クライアントと援助的な関係を形成する上で、どのような関わっていくかを考えていくことはセラピストにとって重要不可欠な課題であるといえよう。そしてケースを担当することで、その考えに幅が広がり、クライアントとの関わりだけを重視するのではなく、具体的なイメージと結びついたセラピストとしての「情的・理的構え」を構築させ、クライアントの主体的充足を促そうと試みていくものと思われる。

そこで、このようにクライアントとセラピストの関係性について考えることは、相談室ケース担当前の臨床心理士養成課程初期で現れた M1・M2 に共通して見られた 1 つの特徴であるといえるのではないだろうか。

またクライアントに寄り添い、クライアントを尊重しようとする立場をとろうと模索している様子は、佐野(1998)が述べている、クライアントの求めている対象である「自分現在の心理的困難な状況に対して、その心理的困難性に共感し、その意味を読みとり、真摯にその原因を共に探索してくれる共同作業者としての対象」であろうとする態度の表れなのではないだろうか。

佐竹(2005)の研究では、心理臨床家に、臨床心理面接でのクライアントとセラピストの関係性の捉え方についてインタビューを行った結果、臨床心理面接における関係性の捉え方が大きく 3 つの様相から捉えられることが示唆された。i) 臨床心理面接で生じているクライアントとセラピスト関係そのものを面接の題材として、面接を進めていこうとする「関係を題材として面接を行う立場」、ii) 面接の中で生じる関係性の治療的な性質を前提とし、それを媒介として問題解決をもたらそうとする考えによる「関係を媒介として面接を行う立場」、iii) セラピストに方法論・技法があり、クライアントがその方法に抵抗な

くのってくるための土台としての関係を築くことを狙う立場をとる、「関係を土台として面接を行う立場」である。また、i)・iii)の様相のみの面接を行っているものは少なく、実際の面接ではii)の様相が同時に生じていることがほとんどであった。このように、クライアントとどう関わっていくかだけでなく、その関係性をカウンセリング場面でどのように扱い、どのように進めていくかというあたりについては、今後の学びや実際に相談室のケース担当をすることで援助観の変容の1つの指標になりうると思われる。

その他にM1・M2の語りの中で共通して見られた点として、セラピストとしての在り方を考える際にクライアントに対する関わりについて、「寄り添う」「受容」など、そういった母性的な関わりに重点を置いている様子が見られた。

諸富(1996)は、カウンセリング研修の場面においては、全ての学習者がその入門段階において学ぶべき基礎として、「受容」や「共感」といったカウンセリングの基本的態度が教えられると述べているが、こういったセラピストの基本的態度についての学びが反映されていること以外にも、母親的関わりを重視する理由があるのかもしれない。

たとえば、非専門家との関係の中で被験者自身が楽になった体験や、聴いてもらえてるいと感じた、もしくはそういった関わりを相手がされているところを見て体験などである。河合(1995)は、気持ちを分かる人間が一生懸命聞いてくれるから、その人も一生懸命に言うことや、そのような関係性に支えられてこそ、そこであきらめてしまわずに、新しい可能性を探すエネルギーが生じてくることを述べている。

本研究において、M1の語りの中では、直接非専門家との関係からこのような体験をしたという語りはあまり見られなかったが、セラピストとしてどのようにクライアントと関係を築いていくのかを模索している背景には、各々の非専門家との関わりの中で受容されたと感じる体験などがあるように感じられる。そして各々の体験と大学院等での学びとを照らし合わせながら、今後担当するケースに備えている段階であるのかもしれない。

一方M2は、もともとケース担当以前からもっていたであろう、「受容」や「共感」といった母親的な関わり方に対するイメージに関して、担当しているクライアントや実習先でのクライアントとの関わりを通し、クライアントの反応を見ながら、そのイメージを捉えなおしているよう様子が伺えた。ケースを担当することにより、M1に比べてその関わり方に対するイメージは、より具体的なものになっている。

以上のことから、臨床心理士養成課程の学びを通して、援助観にどのような変容が見られるかについて考えてみると、臨床心理士養成課程での学びは、非専門家の「一刻も早く治りたい、悩みを解決したい」というニーズに、直接的な即効性のある指導や助言、具体的提案をするという、万能的イメージを持ったセラピスト観から、そのような問題そのものの解決法の伝授ではなく、クライアントの在りようを受容し、一生懸命に聴こうとするセラピスト像へと変容する大きな1つのきっかけとなっているように思われる。

これはM1の時期の学びや実習などを通じた体験は、セラピストが万能ではないことをより明確化するきっかけとなり、それまで持っていたカウンセリングやセラピストに対し

での価値観に修正が加えられる。その上で、セラピストとして何ができるのかという、新たな学びや視点を取り入れながら模索し始めかつ、クライアントとの関わり方を考える準備段階となるのではないだろうか。

そして、その後実際にケースを担当し、面接の中で M1 の段階で修正されたセラピスト観や面接でできること、クライアントにとって良かれと思うことなどの価値観をもって、面接に臨むわけであるが、クライアントの反応が思わしくないことや、面接が思うようにいかないことに直面し、セラピスト側に不安や無力感が生じてくる。このような不安や無力感の中で、クライアントにとって何がよいことなのか、セラピストとしてどんなことができるのか、できないのかについて、実際のクライアントとの関係を資源にさらに真摯に考え続けることで、クライアントに寄り添っていくことの意味、受容していくことの意味を新たに発見することが M2 の学びの段階で生じるのではないかと考える。

M1 の段階でもすでにカウンセラーに対する万能感はなく、クライアントとの関係において具体的なイメージを巡らせている被験者もみられた。このことについて考えてみると、比較的早い段階で、クライアントとの関係について具体的に考えている被験者は、適応指導教室での経験や、自分がクライアントという立場を経験したことが、援助者という立場について考えるきっかけになっている可能性があるものと思われる。

しかし、M1・M2 を通して、「本当はそうではなかったんだな」という気づきが、臨床心理士養成課程の学びや経験が増えるなかで得られたという語りが多く見られたことから、より専門的な知識が増えるということが、それまでもっていた価値観をより現実的に検討し、現実的にできることを模索する機会となっているのかもしれない。

本研究は横断的研究により調査を実施したため、各学年における援助観について検討した上で、ケース担当や専門的学びが、カウンセリングにおける援助観にどのような変容をもたらすのかを考察した。本研究で得られた結果をより実証的に明らかにするためには、今後個人の援助観の変容を捉える縦断的研究により、M1・M2 が学びを積み途中で、援助観にどのような変容が見られるのかを研究することが必要であると思われるが、各学年おいての学びから得られる援助観を検討できたことは、横断的研究の利点であると思われる。また、このように各学年における学びから得られる援助観を検討したことは、縦断的研究個人の援助観の変容を考察していく際に 1 つの知見になるものと思われる。

被験者から得られた結果の考察は、ある程度、実際の被験者の語りに即した視点が提示されていると思われるが、調査の際、研究者が被験者らと同じ臨床心理士養成課程に在籍する大学院生という立場であることから、主観的な検討となっているものと思われます。しかし、本研究の結果でも述べられているように、M1・M2 の両方で、抱えている援助観について模索している様子が多く伺えたこともあり、面接場面では、模索中の援助観を話すことが難しく、不安を感じる被験者も見られたが、研究者も同様の学びや実習を体験していることで安心感を得て、援助観を模索することで生じた不安な感情なども含め語ってくれる場面が見られた。また、同様の学びや実習を体験していることで、スムーズなコミ

コミュニケーションが行われ、伝えることに思いを巡らせるというよりは、被験者の内的探求が活性化されたように思われる。

研究者が被験者らと同じ立場であることによって語られた内容もあるように思うが、今後この結果に一般性を持たせるために、客観的な検討を行った上で、本研究で得られた結果を精錬する必要があると思われる。

文献

引用文献

- ・ 台 利夫 1990 心理臨床家の目指すもの～社会適応と自己実現～ 金剛出版
- ・ Herr,L.E.& Cramer,S. 1988 Career Guidance and Counseling Through the Life Span : Systematic Approaches (3rded.)
- ・ 東山紘久 2001 臨床心理士に期待される学習課題 2. 臨床心理面接技法を中心に日本臨床心理士資格認定協会（監修） 臨床心理士になるために 第14版 誠心書房
- ・ 東山紘久 1986 カウンセラーへの道－訓練の実際－ 創元社
- ・ 伊藤直文 村瀬嘉代子 塚崎百合子 片岡玲子 奥村茉莉子 佐保紀子 吉野美代 2001 心理臨床実習の現状と課題－学外臨床実習に関する現状調査－ 心理学研究, 19 (1), 47－59.
- ・ 金坂弥起 2006 精神科病院における臨床心理実習についての一試論 臨床心理学, 6 (5), 645－650.
- ・ 河合隼雄 1995 カウンセリングを考える 上 創元社
- ・ 河合隼雄 1970 カウンセリングの実際問題 誠信書房
- ・ 河合隼雄 1998 河合隼雄のカウンセリング入門～実技指導をとおして～ 創元社
- ・ 内藤哲雄 2002 PAC 分析実施法入門[改訂版]～「個」を科学する新技法への招待～ ナカニシヤ出版
- ・ 中村謙 2004 臨床心理士に期待する 心理臨床学研究,22(2),208－210.
- ・ 諸富祥彦 1996 「クライエントセンタード」概念の再検討 カウンセリング研究,29 (2),110－119
- ・ 岡田康伸 深津千恵子 2004 臨床心理職の資格問題－臨床心理士への期待と課題－心理臨床学研究,22(2),196－210.
- ・ 岡島一郎 2002 心理臨床家養成課程における心理劇実習の意義について－心理劇 5要素に基づく検討－ 長崎純心大学心理教育相談センター紀要,1,39－48.
- ・ 坂倉重雄 佐野秀樹 福島脩美 1993 カウンセリング研修の効果－研修経験を有す教師と一般の教師、及び生徒指導教諭との比較研究－ カウンセリング研究, 26 (2), 139－145.
- ・ 坂中正義 2005 カウンセリングはどのように理解されているか？－心理臨床家との比較から－ 福岡教育大学紀要, 54 (4), 123－131.
- ・ 佐野直哉 1998 クライエントの求めるものを探して－ある心理臨床家の過去・現在・未来－心理臨床,11,(3) 161－165.
- ・ 佐竹圭介 2005 臨床心理面接における関係性の捉え方に関する一考察 九州大学心理学研究,6,167－174.

- ・ 下山晴彦 2001 臨床心理士の養成カリキュラムの作成にあたって 臨床心理士報 13 (特別号),25-30.
- ・ 白井祐浩 2007 セラピスト訓練の在り方についての一考察～TCT～二つの方向性～九州産業大学大学院 心理臨床研究, 3, 3-7.
- ・ 高良聖 2006 サービス業としての臨床心理士ー臨床ホスピタリティを考えるー ころの科学,125,
- ・ 鶴光代 2001 臨床心理士養成の教育システムとカリキュラム構成 臨床心理士報 13(特別号),15-24.
- ・ 氏原寛 2002 カウンセラーは何をするのかーその能動性と受動性ー 創元社
- ・ 渡辺三枝子 1996 カウンセリング心理学 ナカニシヤ出版

資料 No. 1

Table 1 19 年度開設授業での M1 の履修状況(部分を履修中。)

学期区分	授業科目名
前期	臨床心理学特論 I
	臨床心理面接特論 II
	臨床心理査定演習 I
	心理学研究法特論
	臨床心理学研究法特論 I
	学習心理学特論
	発達心理学特論
	臨床心理基礎実習
	臨床心理実習
	エンカウンター特論
前期・集中講義	家族心理学特論
後期	臨床心理学特論 II
	臨床心理面接特論 II
	臨床心理査定演習 II
	心理統計法特論
	臨床心理学研究法特論 II
	人格心理学特論
	社会心理学特論
	精神医学特論
	学校臨床心理学特論
後期・集中講義	投映法特論

資料 No. 2

Table 2 M2 の履修状況(部分は履修している。)

履修時期	授業科目名
M1	臨床心理学特論Ⅰ
	臨床心理学特論Ⅱ
	臨床心理面接特論Ⅱ
	臨床心理面接特論Ⅱ
	臨床心理査定演習Ⅰ
	臨床心理査定演習Ⅱ
	臨床心理基礎実習
	臨床心理実習
	心理学研究法特論
	心理統計法特論
	臨床心理学研究法特論Ⅰ
	臨床心理学研究法特論Ⅱ
	人格心理学特論
	精神医学特論
M1～M2	エンカウンター特論
M1・集中講義	ブリーフセラピー特論
	システムズ・アプローチ特論
	行動療法特論
M2 前期	学習心理学特論
	臨床心理関連行政論
	心身医学特論
M2 前期・集中講義	家族心理学特論
M2 後期	社会心理学特論
	学校臨床心理学特論
M2 後期・集中講義	投映法特論

その他本編資料には各事例のデンドログラム等が掲載されているが、事例の守秘にかかわる部分であるため、本稿には掲載しない。詳細については、研究者本人もしくは修士論文を所管する講座までお問い合わせください。